

シンガポールの ラッフルズジュニアカレッジにおける 選択言語プログラム（日本語）

坂東 正子

シンガポール 選択言語プログラム（日本語） 日本事情 小論文 進学

1. はじめに

筆者は、1992年1月にシンガポールのRaffles Junior College（ラッフルズジュニアカレッジ、略称RJC）に設置されたThe Language Elective Programme（Japanese）（選択言語プログラム（日本語）、略称LEP（Japanese））の専任教員として、開設当初から1994年12月まで3年間勤務した。Junior College（略称JC）は日本の高校2・3年生の年齢に相当する、大学前段階修学2年間の教育機関である。この制度におけるJCでは、日本の高校のような一般科目を履修するのではなく、修了後の大学進学を視野にCommerce, Arts, Science（商業、文科、理科）のいずれかのコースを専攻し、それぞれの専門科目を履修する。但し、LEP（Japanese）はこのような専攻分野に直結するものではなく、選択科目の一つである。履修者の人数も各学年10名程度で、これはRJCの1学年約750名¹⁾中の極少数に相当するものである。

ここで、LEPに繋がるシンガポールの日本語教育について触れておきたい。但し、シンガポールにおける戦後の日本語教育については、富田（1970）・江副（1980）によりすでに述べられているので、概略を記すのみにとどめておく。

シンガポールにおける日本語教育は、当国の言語政策の一環をなすものである。多民族国家であり、人材が資源であるという当国では、英語と国民の属する民族の言語（華語、マレー語、タミール語）の二言語教育を基本としている。これに加え、中学校（4年制）段階で成績優秀者に、フランス語、ドイツ語、日本語を第三言語として選択・学習できるという制度を設けた。その第三言語の一つである日本語の教育も、1978年に教育省言語センターにおいて中学生を対象に始められたが、学習者の進級・進学とともに1982年には高校生も履修できるよう整備された。但し、それは、基本的には言語教育であり、言語センターにおいて履修できる科目²⁾であった。これを更に発展させる形で設置されたのが、LEP（Japanese）である。

本稿は、このような流れをくむ選択言語プログラム（日本語）の実情報告を目的とするものである。まず、初めに、本プログラムの概略を述べ、その後、特徴

となる日本事情および本プログラムを履修した学生の進路とその修学年数について言及する。よって、構成は、2. 選択言語プログラム（日本語）、3. 日本事情とコースワーク、4. 卒業生の進路、5. むすびとする。

2. LEP (Japanese): 選択言語プログラム（日本語）

2. 1. 概略と特徴

LEP (Japanese)の目的は、G.C.E. O(Ordinary) レベル³⁾（中学校修了時の国家試験）の日本語を取得した言語的・学問的に優れた学生に、より高度な日本語能力をつけさせることにある。この背景には、非英語圏でかつ先進諸国であると位置づけられる国の言語を学習させるという国家の方策がある。

詳細を述べると、LEPは2年間のプログラムで、Raffles Junior Collegeで行われる。従って、この履修資格は、学習者がRJCに入学できる程度の学力を備えていることになる。また、特典として、年間支給額 1,000シンガポールドルの奨学金が2年間支給される。但し、G.C.E. O レベル日本語の成績に一定水準以上の条件が設けられており、また、RJCにおいてLEP履修資格を得たとしても、JC2（2年生）への進級時に再審査がある。

学習内容としては、従来のG.C.E. A0レベル（JCの学生が履修）では日本語のみであったが、LEPでは日本語に加えて日本事情（歴史、経済、社会生活）を学習することを特徴とする。そして、JCにおける履修科目の一つとして、他の必須科目と同一のG.C.E. A（Advanced）レベルに位置づけられる。

このような特設科目であるため、Study-Cum-Immersion Programme In Japan（日本研修旅行）、各種文化活動⁴⁾への参加・体験⁵⁾、来星⁶⁾する日本人高校生との交流など、海外におけるプログラムとしては、日本語に直接触れる機会が多く設けられている。また、教育省も特別に予算を計上し、特別教室設置、教材・図書・機材購入等の条件整備がなされている。日本留学に関しても、優先的に機会が与えられる、情報提供がある等の配慮がある。

以下の小節では、日本語Aレベルの具体的な内容およびプログラムに付随する活動について述べていく。

2. 2. Junior Collegeにおける1科目としての日本語

履修について、RJCでは大多数の学生が、各自のコースと関連のあるAレベルを4科目履修し、それ以外に体育やA0レベルであるGP（General Paper:一般教養的内容で小論を書く）ならびに第二言語を履修する。使用言語については、第二言語以外の授業は英語でなされている。しかし、大学進学に際し要求されるのが3科目であるため、LEP（Japanese）の履修が可能となるが、医・薬学、

工学など要求が4科目である分野を目指す学生は履修できないことになる。そのため、中には、希望や実情に合わせ、A0レベルの日本語を履修するものもあった。

次に、日本語Aレベルの試験構成と授業について述べる。試験は表1に記すように、Paper 1～4の4種類から成り、各内容と時間および評価における比率はその右の通りである。この中のPaper 4が、日本事情の評価である。

表1 試験の構成

Paper 1	漢字、文法、語法、長文読解・要約、作文	3時間	50%
Paper 2	聴解	30分	15%
Paper 3	スピーチとその論題に関する会話、普通会話	20分	15%
Paper 4	試験に代えてコースワーク（小論文）4編を提出		20%
（テーマは日本事情の学習内容に基づく。JC2の3月に1,000文字のものを2編、JC2の8月に2,000文字のものを2編、計4編）			

授業時間に関して、RJCの校時表は1単位時間40分のコマが、各専攻毎に複雑に組まれるが、LEP (Japanese)には1週当たり8単位時間（5時間20分）が与えられた。その時間を、JC1では日本語に5単位時間・日本事情に3単位時間、JC2では同3単位時間・5単位時間を当て指導にあたった。従って、授業内容として、JC1では「漢字の正確な読みと運用」「中級文法の復習」「読解」「聴解」等に比重を置いたが、徐々に読解教材にも日本事情のシラバスにあるような内容を使用し、「日本事情」「コースワーク」へと重点を移していった。このAレベル試験は、マークシート方式ではなく実際の日本語運用力を問うものであるため、「読解問題への答え方」「要約の方法」「トピック会話」「作文および小論文作成」などについて具体的な指導が必要であった。

2. 3. Study-Cum-Immersion Programme In Japan (日本研修旅行)

日本研修旅行は、このプログラムに付随する行事および活動のなかで最大のものであり、1年生を対象に実施される。第1回目（12月に実施）を除き、2回目以降は6月休みを利用して実施している。次の表2は、第2回目のプログラムの概要であり、この約2週間の期間や旅程を基本として、第3回目以降も実施されている。

表2 第2回目のプログラム 1993.6.6.(日)～6.22.(火)

6/6 (日) 10:00	シンガポール発 (SQ988) ----->	20:00 成田着	(世田谷区留舎泊)
6/7 (月)	・シンガポール大使館表敬訪問	・歓迎レセプション	

- 6/8(火)～6/14(月) 1週間の体験入学 (ホストファミリー泊：7～13日の夜まで)
 (於渋谷教育学園幕張高校、多摩大学附属聖ヶ丘高校など系列高校4校)
- 6/15(火)～6/18(金) 東京近辺見学・観光 (世田谷区宿泊：17日の夜まで)
- ・キッコーマン工場見学
 - ・江戸・東京博物館見学、東京観光
 - ・東京大学留学生センター訪問
 - ・送別会 (参加：ホストファミリー、日本側責任者)
- 6/18(金) 午後新幹線で関西へ移動 (琵琶湖湖畔の宿泊2泊、神戸・箕面泊)
- 6/19(土)～6/21(月) 研究所見学・関西観光
- ・住友化学総合研究所見学
 - ・観光 (二条城・法隆寺・大阪城等)
- 6/22(火) 12:00 大阪 (伊丹) 発 (SQ985) ----->17:15 シンガポール帰着

これは経済団体、企業および私立高校の協力で実施されるプログラムであり、工場や研究所見学などの見学場所は年によって異なる。また、体験入学は、高校生のホストの家に滞在しホストと共に通学することを基本としている。

出発前に、日本での生活および見学・観光に関する指導を行うが、学習者に提示し意識づける目的は、次の3点である。①日本語環境にない学生が、日本でのホームステイや体験入学をはじめ、工場見学、研究所見学、大学訪問などの様々な活動を通して、生きた日本や日本語を学ぶ。②コースカリキュラムの日本事情で学習した(学習する)内容を実際に確認(経験)するとともに、シンガポールで体験することのできない日本文化に触れる。③コースワーク(日本事情)の研究テーマと関連づけて、各自テーマを一つ持って参加する。

成果として、交通費・物価等の物質的な相違及びもてなし方・行動パターンの等の精神的文化的相違を実体験できたことが挙げられる。そして、帰国後、思い出や課題を1冊の冊子にまとめるとともに、7月以降の学習の中で、日本語力の伸長したことが、生徒、教師ともに実感できる。

3. 日本事情とコースワーク

3. 1. 日本事情のシラバス

概略でも述べたが、LEP(Japanese)は、中学校段階で学習の中心であった日本語に、新たに日本事情を加えたところにその特徴がある。以下の表3は、シラバス(指導項目)とその目標である。但し、このシラバスは、筆者が担当する前に決定されていたものである。

表3 日本事情のシラバスと目標

I. 歴史(近・現代を中心に)	目標：日本がどのようにして近代国家をつくりあげたのか、その歴史的経緯を理解させる。
-----------------	---

●近代国家の成立	●新しい民主国家・日本			
・ 開国 ・ 明治維新 ・ 外交政策	・ 連合軍の対日政策 ・ 産業の復興 ・ 産業革命 ・ 2つの世界大戦			
・ 帝国憲法発布と国会開設	・ 日本国憲法 ・ 経済大国としての登場(国際支援)			
II. 経済 目標：資源の少ない日本がどのようにして、今日の経済大国となり得たかを理解させる。				
●高度経済成長	●貿易	●主要産業	●企業	
・ 産業構造の変化	・ 貿易の特徴(貿易構造) ・ 貿易問題(貿易摩擦)	・ 先端技術	・ 日本的経営 ・ 労働条件 ・ 大企業/中小企業	
III. 社会生活 目標：日本人が現在どのような社会生活を送っているのか、また、今日的な社会問題にはどのようなものがあるのかを理解させる。				
●統治のしくみ	●教育問題	●環境問題	●人口問題	●家族生活
・ 三権分立 (国会/内閣/裁判所)	・ 学制	・ 公害 ・ 自然破壊	・ 高齢化(社会保障) ・ 通商通関	・ 家族構成 ・ 住宅事情 ・ 消費生活
・ 外交				

表3をもとに、本節では、日本事情の目標、学習者にとっての日本事情および担当者から見る日本事情の観点より、論評しまとめていくことにする。

まず、目標については、表にある通り、「日本の近代国家成立への歴史的経緯」「今日の経済大国としての日本」および「その結果としての日本の現代社会」を学ぶという意図が窺える。従来の関心あるいは研究対象であった伝統文化ではなく、また、一般的な日本・日本人論でもない、国家の発展に関する情報や方策を求めているところに、シンガポールの目指す方向が明白に読み取れる。かつて、リークワンユー首相(現上級相)が唱えた「ルックイースト」にも通じる、と筆者は考える。しかし、そのような目的では、最近の日本経済の状態から判断すると、「何を、どう学べるか(一体、学ぶものがあるのだろうか)」という否定的な見解が見えてくる。即ち、それは、「日本事情」の学習意義をどこに置くかという問題でもある。

次に、学習者が履修する他教科の中で日本事情と関連するものとして、歴史、経済学、GPが挙げられる。これらは、JCの科目として一定の水準を持つものである。従って、たとえ第三言語である日本語で学習するといえども、日本事情にも一定以上の水準が求められる。しかし、現実には、中学校段階で文型を中心に学習してきたため、特に入学当初は、日本語能力と教材の日本語との間に落差のあることは否めない。実際、語彙力、聴解力、内容理解等の理由で、日本事情の最初の授業でショックを受けた学生もあった。但し、日本研修旅行後には、知

識や聴解力の面で、かなり日本語に慣れたとの印象を受けている。

では、この日本事情は、学習者にとってどんな意味を持つものであったのか。残念ながら、当時の筆者は、シラバスにある内容をいかに教えるかという方法や教材で苦心したが、学習者にとっての意味にまで考えは及ばなかった。ただ、学習者の内面の一端は、各4編ずつ作成した小論文から窺うことができる。

そして、担当者にとっては、学生の日本語力を考慮して本文にルビをふる・語彙ノートを用意する等の方策を用いたが、最大の困難点は適切な教材探しであった。1992年当時、一般的日本紹介の教材はある程度あったが、特定の分野を詳しく記述する専門的なものは少なかった。このことは、日本事情を、その分野の専門家が担当するのか、あるいは、日本語教師が日本語と日本文化の関連で担当するかの問題にも関係するものである。しかし、現実には筆者が担当者であったので、関連の文献および日本の新聞を読み、知識の蓄積と社会事情の見方に筆者の時間を割いて備えた。結果として、高度経済成長との関連で、現在の日本の姿を分析的に観察・論評する契機になったことが、筆者にとっての成果であると考えている。加えて、学習者に小論文指導をする中で様々な事象に苦慮することもあったが、文章論と関連させた筆者の研究テーマ⁶⁾はここに出発点がある。

3. 2. 評価としてのコースワーク

日本事情の評価は試験ではなくコースワーク、即ち小論文で行う。本節では、小論文に関する学習者の実態および指導の実態について述べる。

学習者の実態については、学習内容を理解するだけでも困難であると感じる場面もあったが、J C 1を修了するころには日本事情に慣れてくる。この段階で、小論文を書く作業が入ってくる。文章を書くことについては、日本語で作文を書いたことはあるが論理的な文章を書いたことはない、述べたい主張や批判的な見解はあるがその手段としての日本語に問題がある、等の実情が挙げられる。

このような文章実態を持つ学習者に対して、筆者が要求した作業内容と手順は次の①～⑥である。①シラバスから論題を決める。②論題に関する学習者独自の考え(主題文)を立てる。③文章構成を考える。[・序論(問題提示/問題提起)・本論(主題文、序論で提示した問題についての話題展開)・結論(学習者の主張・まとめ、②の主張とこの結論の繋がり)] ④以上の①～③をもとに筆者が提示した形式に沿ってアウトラインを作成する。(これが出来た時点で、主題文と結論との関連性、文章構成などの観点から最初の助言を与える。堅実なアウトラインが出来れば、かなり見通しがついたと言える。) ⑤このアウトラインをもとに小論文(下書き)を書く。(この下書きに対し指導者は助言を与える。) ⑥助言をもとに小論文を完成させ提出する。

下の表4は学習者が作成したアウトラインの実例である。

表4 学習者作成のアウトライン

論 題：「第二次世界大戦」（コースワーク1000文字用）	
主題文：世界平和のために、世界中の国々は握手して、二度と世界大戦を繰り返さない意志を持つべきだ。	
（小論文のアウトライン）	
序 論：今日、平和の環境に住んでいる我々は戦争の残酷さをわかって、世界平和を維持するべきだ。	
本 論：①日本と第一次世界大戦との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・大戦景気 ・軍国主義
②日本と第二次世界大戦との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・満州事変 ・日本の無条件降伏
③侵略者と被害者との関係	
結 論：日本は発達していて、経済進出の手段として、世界から得る利益は著しい。	←← ???この結論と 主題文との関係

この後、指導者による評価、そしてG. C. E. 当局による Paper 1～4 に対する総合評価を経て、翌年3月に成績が出される。指導者による評価の観点は、a. 内容、b. 構成と展開、c. 使用語彙、d. 言語の正確度であるが、詳細は非公開である。

ただ、学習者の小論文に関する弱点として、アウトラインに序論・本論・結論への内容展開が見られない、主張が不明確である、主張と結論に繋がりが無い、参考文献の要約に近い等が挙げられる。このような事象について、助言を受けながら作業を進めることになる。完成したものの中には学習内容や参考文献に迎合的なものもあるが、批判的あるいは星日対比的に論理を展開させる立派なものも少なくない。特に、太平洋戦争・昭南島時代については中学校時代の歴史学習を基に、日本の高校生は知っているだろうかと思うような本音で言及している。

とにかく、コースワークとしての小論文作成は、学習者にとって時間を要する困難な作業であるからか、完成させたという成就感を漂わせながら提出し、記念にコピーを取っておくという学習者もいる。

4. 卒業生の進路

中学校段階で特別に第三言語として日本語が学習でき、かつ、R J Cで特設のL E P (Japanese)を履修した学生は、大学進学時にどのような道に進むのであろうか。国の大学であるN U S (the National University of Singapore: 国立シ

ンガポール大学)には、日本研究科が設置されているが、既習者を対象としたものではない。そこで、本節では、LEP修了者について、日本留学者、国内の大学進学者、英米留学者の例を基に、進学先とそれに伴う修業期間、日本語との係わりを見た後、それを一般化して述べたい。

まず、後の表5に挙げる学習者1.PL~6.YT(3.のみが男子学生)について、予め進路を簡単に述べておく。但し、学習者の卒業年次が同一ではないため、表は11月のJC卒業時と翌年3月のAレベル結果発表を基準に、大学卒業までに何年要するかを対比できるようにしたものである。

<学習者の進路概略>

- 1.PL : JC卒業後NUSに入学(化学専攻)したが、中退して日本留学。最初、大阪外国語大学留学生日本語教育センターで予備教育を受け、1年後、東京外国語大学へ進学。
- 2.CA : JC卒業の翌年4月に私費で来日。国際学友会日本語学校で1年間日本語を学習。慶応大学商学部へ入学。
- 3.野舛 : JC卒業後、2年半のNational Service(兵役)に就く。終了後NUSに入学。経済学を専攻。
- 4.WY : JC卒業の翌年7月に国立NTU(the Nanyang Technological University: 南洋工科大学)へ入学。会計学を専攻。短期留学で4カ月間、関西外国語大学で学ぶ。
- 5.YC : JC卒業の翌年9月にイギリスの大学へ進学。化学を専攻。入学後3年目に交換留学生として学習院大学で1年間化学を学ぶ。
- 6.YT : JC卒業の翌年9月にアメリカの大学へ進学。経済学を専攻。

表5 JC卒業から大学卒業までの期間 ※表中の期間は日本語予備教育および大学在学期目を表す。

学生、JC卒業年次、大学での専攻分野	Aレベル JC卒業1結果	JC卒業1年目	JC卒業2年目	JC卒業3年目	JC卒業4年目	JC卒業5年目	JC卒業6年目	JC卒業7年目
1.PL '93 日本文学	A	(NUS入学)	'95.4.16 日本語教育センター	'96.4 東京外大入学				'00.3. 大学卒業予定
2.CA '93 商学	A	'94.4 学友会日本語学校	'95.4 慶応大学入学				'99.3. 大学卒業予定	
3.野舛 '95 経済学	A	兵役 '95.12.	(2年半) ~'98.6.	'98.7. NUS入学			'01.4. 大学卒業予定	
4.WY '94 会計学	A	'95.7. NTU入学	'96.9 短期留学		'98.4. 大学卒業			
5.YC '94 化学	A	'95.9. イギリス留学		'97.9 交換留学	'98.9 復学	'99.6. 大学卒業予定		

6. YJ '93	A '94. 9.				98. 6.		
経済学	7/1カ留学				大学卒業		

上記の概略および表5を基に、女子学生の大学入学時期と修学年数を対比的に見ていく。まず、入学時期は、国内の大学あるいは英米の大学なら、私費学生、奨学生に関係なく翌年7月、9月などに各大学の入学時期に合わせ入学できる。一方、日本留学の場合、私費なら翌年4月に来日して日本語教育を受け、その1年後に進学となる。しかし、国費留学は、国のPSC (The Public Services Commission: 人事院) の認可との関係で、翌々年4月に来日することになる。その結果、表に示すように、国内あるいはイギリスの大学なら最短3年で、アメリカの大学なら4年で卒業できるのに対し、日本留学の場合は、日本語予備教育期間を含め5年を要することになる。しかも、1. PLのように国費留学生は、来日時期も遅くなるため、JC同期の2. CA、6. YJよりはるかに遅く卒業することになる。また、男子学生は兵役修了後に進学するが、日本に留学する場合は4月の入学に合わせ兵役途中で来日している。

次に、日本語との係わりを見ると、LEP 1期生12名中2名が、3期生10名中2名が留日している。表の2. CAは商学部へ進学したが、他の3名は東京外国語大学で日本語あるいは日本文学を専攻している。この他に、4. WY、5. YCのように短期留学あるいは交換留学で来日するものが数人いる。また、6. YJの専攻は経済学であるが、日本語も履修している。YJのような履修方法をとるものが、NUSやNTU進学者の中にも何人かいる。

現在、筆者が感じることは、LEP (Japanese) 修了で直接日本の大学へ進学するのは難しいということである。特設科目で日本語能力を伸ばさせるために様々な配慮はなされているとはいえども、それは海外における、英語との繋がり強い国での日本語環境においてである。シンガポールから毎年十数名が国費留学生として来日しているが、LEP 修了かあるいは全くの未習かに関係なく、彼等は1年間の日本語予備教育を受けているのが現実である。

5. むすび

LEP (Japanese) 履修者は各学年10名程度の小人数であるが、シンガポールにおける戦後の日本語教育の流れを受け継ぎ、それを集大成したものがこのプログラムであると言える。加えて、当国における1980年代から90年代にかけての日本語ブームが、中学生に日本語学習の後押しをしたと言える。

しかし、LEP 修了者が大学進学・卒業しつつある現在、このプログラムを履修した(する)利点は何であるかの評価が必要となる。開設当初、修了者は日本

の大学へ直接入学することも考えられていたが、実際は従来通り1年間の日本語予備教育を受けた後進学している。日本語との係わりについても、日本の大学への進学および交換留学生、専攻外の一般履修科目として保持する学生、全く日本語と無関係になる学生等様々で、必ずしも固執しているわけではない。

また、日本事情のシラバスも検討を要する。経済や社会事象は時代とともに変化し、それに合わせて観点や評価も変化する。そのため、指導者には現実に照らし運用方法を工夫する必要が出てくる。あるいは、変更が必要になることもある。

註)

- 1) 筆者が勤務した1992～94年当時のRJC生は国の一人っ子政策時代の子女で、人数の少ない世代に属する。その数年前の人数はこれより多い。(cf. 1989年: 1002名、1991年: 884名)
- 2) 言語センターでJCの生徒も日本語を学習したが、RJCへはセンターの教師が出張教授していた。
- 3) G. C. E. (General Certificate of Education) Oレベルは中学校修了時に、A (Advanced) レベルはジュニアカレッジ修了時に受ける国家試験である。これらの結果が進学先を決める資料となる。なお、AOレベルもジュニアカレッジ生が履修する科目であるが、Aレベルのように大学進学に直結するものではなく一般教養的な意味合いをもつ。
- 4) 当地で開催される日本文化の発表会への招待、日本人会およびその会員の協力による体験等、参加・体験の機会が多い。
- 5) 星はシンガポールを意味する。
- 6) 拙稿(1998)「文脈把握にみる日本語母語話者と日本語学習者の接続表現比較」『小出記念日本語教育研究会論文集 6』および「日本語学習者の文章における文脈展開 -文章の階層構造と話題の繋がり-」大阪外国語大学修士論文等を意味する。

《参考文献》

- 江副隆愛(1980)「シンガポールの日本語教育」『日本語教育』41 日本語教育学会 pp.121-139
- 奥西峻介(1990)「日本事情の授業・3 -日本事情から日本文化へ、そして…」『言語』Vol.19 No.10 大修館書店 pp.42-47
- 金本節子(1988)「日本語教育における日本文化の授業」『日本語教育』65 日本語教育学会 pp.1-15
- 佐々木倫子(1988)「大学正規科目としての日本事情教育」『日本語教育』65 日本語教育学会 pp.41-50
- 産能短期大学日本語教育研究室編(1990)『大学生のための日本語』産能大学出版部 pp.168-182
- 田村慶子(1993)『「頭脳国家」シンガポール』講談社現代新書 pp.135-164
- 富田隆行(1970)「シンガポールにおける日本語教育」『日本語教育』15 日本語教育学会 pp.37-42
- 長田紀子(1988)「シンガポールの日本留学経験者に関する調査」『日本語教育』65 日本語教育学会 pp.177-196
- 永田晴康(1979)「シンガポールの言語環境と言語教育制度」『日本語教育』39 日本語教育学会 pp.65-79
- 細川英雄(1990)「日本事情の授業・2-教養部スタッフと協力して」『言語』Vol.19 No.10 大修館書店 pp.35-39
- (1994)『日本語教師のための実践「日本事情」入門』大修館書店
- 水田 修(1990)「日本事情とは何か」『言語』Vol.19 No.10 大修館書店 pp.22-27

(大阪外国語大学非常勤講師)